

## 障がい者が地域の人々とともに生きる地域を どうつくるか

### 提 言

障がいのある方に、  
それぞれの特性に応じた  
自分らしく生きることの出来る  
地域活動の場を提供しよう。

### 登壇者

【進行役】	土屋 幸己氏	(一社) コミュニティーネットハピネス代表理事
【アドバイザー】	蒲原 基道氏	前厚生労働事務次官
	内布 智之氏	(一社) 日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構代表理事
	杉田 健一氏	(特非) 縁活代表

### ■ 寄せられた声から

- パネリストが当事者の人というのはまさに共生ですばらしいと思った。
- 当事者の立場からのお話が聞けて良かった。
- 地域活動をしています、障がい者への取り組みをやりたいので、参考にしたいために参加しました。とても良かった！ 夢は多目的ホールをつくりたい。

### ■ 議事要旨 土屋 幸己氏

分科会20は、当初4名のパネリストの参加を予定していたが、台風等のため2名の登壇者が欠席となり、登壇者2名とアドバイザーによる開催となった。進行役の土屋から、本分科会の趣旨説明の後、各登壇者からの発言をいただく。以下、その発言からのポイントをまとめる。  
滋賀県栗東市 NPO法人縁活 杉田健一氏

杉田氏は12年間障がい者施設で生活支援をしてきた経験から、障がい者が安心して生活できる地域共生の街を行政、住民、地域団体と作り出すという取り組みに着手した。

活動を進めていく上でのポイントとしては、①障がい者同士が結婚を希望したとき、当初支援者は反対したが、本人の希望であるためチームで支援することにした、②夫婦で生活できるグループホームを用意した、③必要に応じた働く場の確保→就労継続支援事業B型赤字からのスタート→現在利用者20名以上、④新しい価値観の導入→ファーマーズマーケット、クラインガルテン、種の学校（食育）、オーガニック農園→若い世代の関心高揚、⑤法人の理念は共生の街づくり。

まとめとして、杉田氏は、自己決定の支援が大切で、自己決定とは自分らしく生きること、必要な支援を受けながらも自分の生き方を自らが決定できることと述べた。  
(一社) 日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構 内布智之氏

内布氏は相談支援事業を中心に自立生活援助、地域移行支援を行っている。特に自立生活援助では、ピアの立場で地域生活の御用聞きとして困りごとと一緒に考えるというスタンスで活動し、利用者との信頼関係を構築し

ている。

活動を進めていく上でのポイントとしては、①リカバリーストーリーを大切に→一度失った人生の希望を取り戻し、新たな人生をスタートさせる、②自分自身が障がい引きこもっているときは家庭では一人ぼっちであったが地域に出てつながりができた、③自分が障がい当事者になってみて相手の気持ちが理解できるようになった、④障がい当事者はコミュニケーション能力が弱いので孤立しやすい、⑤障がい者を理解するポイントは→皆が多様な生きづらさを持っていることを知る、可能性を見出す、希望を見出す、⑥自己肯定感が低い人が多いので自己肯定感を高めるアプローチをする、⑦ピア・ロールモデルが重要→障がい当事者には身近なロールモデルが必要。

まとめとして、地域生活や就労の場面で大切なことは、精神障がいとひとくくりせず本人の特性に合った支援をすることと発言した。

アドバイザーの蒲原氏からは、サービス利用者の特性を理解しながら個別のプランを作成することが基本となる。また、障がい支援の事業に関しては、給付があるためこの事業を活用しながら農福連携や地域でのレストランや居場所等を展開することにより、障がい者の社会参加が図れる。障がい者である前に一人の人間として認め合うことが地域共生社会の第一歩であろうとまとめられた。

以上を踏まえ提言をまとめた。

### アンケートの結果 参加者概数：108名 回答者数：100名

